夜鳴ク学舎ノ怪異譚

東条カリン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

榛（はしばみ）高等学校に通うオカルト研究部員、秋元（あきもと）　綾（あや）。高校が夏季休暇にはいってからしばらくしたある日、オカルト部の部員全員を集め、肝試しも兼ねて夜にこっくりさんをすることになった。

この時はまだ誰も、後に起こる悲劇を、惨劇を、予想することは出来なかった――――。

目次

プロローグ ―― 1
第弐話／異変 ―― 7
第参話／隠鬼（かくれおに） ―― 12
第肆話／追駆（おいかけっこ） ―― 18
第伍話／参白（しろみっつ） ―― 25

プロローグ

「あっづいぃ……」

榛（はしばみ）高校1年のオカルト研究部員こと私、秋元（あきもと）綾（あや）は、この夏、暑さにやられていた。

愛すべき我が家には空調設備といえば扇風機くらいのものしかなく、地球温暖化によって年々上昇する気温に対応することが出来ていない。

夏季休暇に入っているため、私立が故の潤沢なお金によってクーラーが取り付けられている我が校に行くこともない。何か涼しくなるようなものがないものか。

ピリリリリリリ

不意に携帯の受信音が部屋に鳴り響いた。

察している人もいるかもしれないが、我が家にはお金が無い。携帯は今の時代、私の世代としては珍しくガラパゴスケータイである。

中学の頃より使っている相棒に表示されているのは、オカルト研究部部長、2年の犬飼（いぬかい）直義（なおよし）さんの名前だった。ちなみに3年生はもう引退している。

「……もしもし。おはようございます。秋元です……」

『やあ、おはよう。今にも溶けそうな様子だね』

「比喩抜きで溶けそうでぇす……」

はっはっは、と元気な声で笑う部長になんでこんなに元気なのかと不思議に思った。

そこで、ふと思いついた可能性を口にした。

「部長、もしかして学校にいます？」

『よくわかったね』

ずるい、と思うと同時に、なぜ学校へ？とも思った。しかしその答えは質問する前に告げられた。

『実は今日、部の全員で、ある企画をしようと思ってね。その準備をしてたのさ』

「へぇ……」

企画。オカルト研究部はその活動内容から、ほとんどそういったものは無い。それ故、その内容に興味を惹かれた。

「して、その内容は……」

『来てからのお楽しみさ』

知ってた。

『待ってるよ』

それだけ言うと部長は通話を切った。

「これは行くしかないでしょ！」

私は居間で刑事ドラマを見て手に汗を握る母に一言声をかけて、使い古して怪しい音のする自転車で学校へ向かった。

■□??■□??■□??■□??■□??■□

山の上にある学校の坂道の中腹あたりで、正門で手を振る部員の皆が見えた。

手を振りながら自転車を漕いでいると、地面にあった石ころで車輪が弾んで派手にこけてしまった。

自転車を押しながら皆の下まで行くと、同じクラスで双子の古宮利恵（ふるみやりえ）と古宮千恵（ふるみやちえ）が心配そうな顔で話しかけてきた。

「あやちー大丈夫？」

「あやにゃんケガしてない？」

あやちーと呼ぶのは利恵で、あやにゃんと呼ぶのは千恵である。ちー呼びまだわかるものの、なぜにゃん付けで呼ぶのかは中学校以来の謎だ。

「うん。大丈夫だよ。ありがとう」

「片手運転なんかするからだ」

「うっ……」

そう言うのは2年の先輩部員、五条晋助（ごじょうしんすけ）先輩だ。私はこの人が少し苦手である。

何かと言えば私をからかうのだ。

「まあまあ、シン先輩。そのくらいにして早く行きましょうよ」

晋助先輩を宥なだめているのは同級生の佐藤優樹（さとうゆうき）。保育園以来の幼馴染である。色々と助けてくれている彼は少し気になっている。

「さ、行きましょう。部長が首を長くして待ってるわ」

最後の部員、2年生、副部長の神原沙苗（かみはらさなえ）先輩が促したことで私達は部室へ向かった。

■□??■□??■□??■□??■□??■□

「待ってたよ！」

犬飼部長が黒縁のメガネをクイッとあげてニコニコしながら言った。

「部長、おはようございます」

「ああ、おはよう！早速なんだけど本題に入るよ？今日は皆暑い思いをしているだろうと思って涼しくなれる企画を思いついたんだ」

「「そ、それは……!?」」

古宮姉妹がノリに乗って先を促す。

「夏、涼しいと言えばこれ！肝試しだ！」

「「いえーい!!」」

3人が拳を突き上げてはしゃぐ。

「ただの肝試しじゃない。我が部らしく、こっくりさんをしてからの肝試しだ！」

それはなんというか……個性的な。

「……俺、帰ろうかな」

私はいつもからかってくる晋助先輩に、仕返しをした。

「あれ？晋助先輩、もしかして怖いんですか？」

「は、いや、別に怖くねぇし！」

そんなあからさまな態度に神原先輩が笑った。

「ふふっ。素晴らしく模範的な回答ね」

「……うるせえな」

晋助先輩は耳まで赤くしてそっぽを向いた。
それを見て部員の皆が笑った。

ひとしきり笑った後、優樹が質問した。

「部長、肝試しって夜にしますよね？まだ早いと思うんですが」

「もちろんさ。色々買ってあるから夜までに英気を養おう！」

戦士じゃないんだから……。

私達は、食べたり飲んだりながら談笑して、夜まで過ごした。

そしてついに、肝試しの前哨戦、こっくりさんを始めることとなった。

第弐話／異変

「……さあ、やるぞ」

部長の声に、ゴクリと喉を鳴らす音が聞こえた。それは怖がっていた晋助先輩かも知れないし、今、不思議と緊張している私かも知れない。もし、今の私と同じ気持ちなら、他の皆も。

ちなみに、こっくりさんは肝試しをするグループ毎にすることになっている。まず第1グループの私、利恵、千恵、部長。第2グループの沙苗先輩、晋助先輩、優樹で別れている。

部長が静かに息を吸う。

「こっくりさん、こっくりさん。どうぞおいでください。もしおいでになられましたら『はい』へお進み下さい」

始まった。そして、私たちが人差し指をのせた十円玉が動――――

―

「いよーーーっす！元気してるか、生徒共！」

バァンッ！と大きな音をたてて部室の扉が開かれた。

張り詰めた空気であったために、千恵が驚いて十円玉から指を離してしまった。

制止する間も無かった。なんせ私も驚いていたのだから。

「おっ。こっくりさんかぁ！懐かしいなー！先生の世代はうちのじいちゃんの影響で友達から広がってな。結構人気だったんだぞ？あっ、

こらこら千恵！指離しちゃダメだろ？」

「うぅーー！先生のせいだもんっ！」

千恵は頬を膨らませて不満そうであるのに対して、私や古宮姉妹のクラスの担任の女教師、丹波久美先生は実に満足そう、かつ楽しそうに笑っていた。

確信犯だ、この人。

ケラケラと笑っていた久美先生だったが、ふぅーっと一息ついた。

「はぁー。笑った笑った。学生諸君！許可貰ってるとはいえ、あまり遅くまでいるなよ？帰りに補導されるからな。じゃあな～。」

久美先生はチラリと千恵に目を向けると、わざとらしく、ぶふっ！と吹き出して出ていった。

「もぉーー！」

またもや怒っている千恵を宥めて、こっくりさんを再開することにした。しかし。

「……ねえ。何か変な音が聞こえなかった？」

不意に沙苗先輩がそんなことを言い出した。少し顔を青くした晋助先輩が慌てて茶化した。

「ちょ、おいおい沙苗！いくらなんでもそりゃねぇって！怖がってんの認めるからマジでやめてくれよ！」

「いや、違うのよ。声が聞こえたとかじゃないの。何かが弾けたような音よ。例えば水風船みたいな」

しかし、私達の予想とは反して沙苗先輩が聞いたのは冗談じみた霊的なあれこれではないようだった。

「はぁ。まったくあの先生は姿を見せなくても驚かせようとするなんて。困ったもんだよ。沙苗が言ったようにまさしく水風船の音だろう」

呆れたような様子でため息をついて部長が言った。しかし、次いで聞こえてきた音は私達の耳にも届いた。誰かが走って来る音だ。

そして、またしても勢いよく扉が開かれた。やはりそこに居たのは久美先生だった。しかし、少し前の彼女と違っている点をあげるとすれば、左腕がないというところだ。付け根からはおびただしい量の血が噴き出ている。

言葉を無くした私達に、先生は必死の形相で言葉を発した。

「お前ら！今すぐここから」

逃げろ、と。その言葉を言い切ることは出来なかった。

黒が。影が。夜が。久美先生の胸を後ろから刺し貫いたから。

久美先生は口と胸から血を噴き出して目から光を失い、黒い何かが久美先生の身体を宙吊りにした。

ビクリビクリと久美先生の亡骸（なきがら）が震え、やがて動かなくなった。

訪れる静寂。あるのは液体が噴出して床に落ちる音だけ。誰も話せない。誰も動けない。

夜が、夜だけが、僅(わず)かに動いた。

直感だった。衝動的だった。でも、動けた。命を救えた。

私は、利恵に飛びついた。利恵の頭があった位置を通って夜が部室の壁に突き刺さった。そして、沙苗先輩の悲鳴を合図に、私達は校舎の外へ出るべく、部室のもうひとつの扉から出て、蛍光灯の消えた廊下を走った。

■□??■□??■□??■□??■□

「……っはぁ、っはぁ!……んなんだよ!なんなんだよアレぇ!?」

「わからないっ!でも、……っはぁ……とりあえず走れ!話はそれからだっ!」

私は走りながらチラリと後ろの部室を見た。

見た。

それを。

肉を貪り、血を啜(すす)る、黒く蠢(うごめ)くそれを。

ゆっくりと此方を振り返り、ニタリと嗤(わら)う愉悦を秘めた目を。ずらりと並んだ鋭い歯を血糊で飾った口を。両の手足についた揺らめく爪を。

私は見た。わざわざ、ご丁寧にも私に見えるように先生を久美先生の遺体を持ち上げ、ぶら下がった腸を麺類よろしく啜り、グチャグチャと口を開閉して嚥下（えんげ）し、自らの口内を見せつける怪異を。

ゆったりと歩く構えをとった姿を見て、姿勢を見て、わかったことがある。アレは、狐だ。

「こっくりさん」

ここに地獄の鬼ごっこが始まった。

先程まで綺麗に輝いていた月は、雲に覆われて全く見えない。

第参話／隠鬼（かくれおに）

私達は昇降口のすぐ側、生徒靴用のロッカー前まで来ていた。

息が整って来た私達は、目の前で殺された久美先生の凄惨な死に様を思い返して、何も話せなかった。

しばらくして、この場で優樹が初めて口を開いた。

「……アレ、なんだったんですかね」

「知らねえよ……。わかるわけねえだろうが!?」

優樹の質問に、晋助先輩が悲鳴のような怒号をあげた。ビクリと利恵の肩が震える。

ちょっと待って。利恵の？待って。今いるのは、私、優樹、部長、晋助先輩、沙苗先輩、利恵――――

「――――千恵はどこ？ねえ、あやちー、皆。千恵は、どこ？」

私がその事に思い至るより少し早く、利恵が気付いた。

その場の全員の顔がサッと青くなる。利恵にいたっては、もはや土気色をして膝が震えている。そしてついにはペタリと座り込んでしまった。

親友のそんな姿を、私は見たくなかった。だから。

「……私が、探しに行きます」

勢いよく此方を振り返った優樹が私の提案に反対する。

「待ってよ綾！行ったところで――――」

「優樹！」

私が慌てて遮るが、遅かった。利恵が優樹を恨みすら込めたような目で睨んだ。そして優樹に近づいて行く。

優樹は気圧されて利恵に合わせて後ろに下がっていき、やがて壁にぶつかった。

「……ねえ。何それ。千恵が、私の大事な妹が、死んだって言いたいの？それを望んでるわけ？」

「そ、そんなことは言ってないじゃないか！」

口をついて出た反抗的な言葉に利恵の眦がさらに吊り上がる。

「はあ？じゃあなんなわけ?!いなくなっただけの人が必ず死んでるなんて限らないじゃん！」

腕を大きく振り上げた利恵を見て私は咄嗟に利恵を止めていた。私の腕の中で優樹を殴ろうと暴れている。そして、怒りの矛先は私にも向いた。

「なんで止めるの!?こんな奴庇わなくたっていいじゃん！あぁそっかそうだったよねぇ!?綾はコイツが好きなんだもんねぇ!?じゃあしかたないよねぇ!?」

言葉の棘が私に突き刺さって、顔が歪む。胸が張り裂けそうに痛

む。泣きそうになるのを堪えて、利恵を宥めた。

「……利恵。生きてるなら……探さないと。きっとすばしっこい千恵のことだから……逃げ延びてるよ。ね……？探しに行こう？私も行くから」

ハッとした顔で私を見上げて、暴れるのを止めたため、利恵を離した。しかし目にも留まらぬ速さで平手を振り抜いた。

パーンッと小気味のいい音が響いた。

「……これで手打ちにしてあげるんだから感謝してよね！ふんっ」

そう言い残すと利恵は私達が降りてきた階段へ向かった。私もそれについて行った。

■□??■□??■□??■□??■□??■□

「さっきは酷いこと言ってごめんね、あやちー」

歩いていると、不意に利恵が俯きながら謝ってきた。私は気にすることないよ、と伝えたが、うん、ごめんね。と謝罪が帰ってきた。やはり気分は晴れないようだった。

「いいよ、利恵。私も、その気持ちはわかるから。」

だから、私は今まで誰にも話したことは無い自分の過去を話すことにした。

「私さ。家族で海外まで山を登りに旅行へ行ったの。小さい頃ね」

「へぇ。どこに行ったの？」

「ふふっ。それがもう覚えてなくて。なんでかって言うと、お父さんが下見に行ったきり帰ってこなくてさ。捜索隊を出して貰ったんだけど見つからなくて。私、『お父さん探しに行くー！』って言って聞かなかったんだ。」

「ええ?!それは無茶だよ！」

利恵はぎょっとした顔で私を見て大袈裟に驚いていた。

「あはは！だよね。私もそう思う。でもいても立ってもいられなくて。今の利恵みたいにさ」

「あっ……」

「だから、気にしなくても良いんだよ。利恵。それに千恵も見つかる。今頃家でゴロゴロしながらテレビを見てるお父さんも見つけた私が太鼓判押すよ？」

「ええ?!あやちーが見つけたの?!」

「そうだよ？」

「私のあやちーが思ってたよりパワフルガールでちょっぴりショック……」

「誰が利恵のよ？」

いつもの様子を取り戻した利恵と私は顔を見合わせてクスリと笑った。

きっと見つかる。絶対に見つけてみせる。そして、全員で生きて帰って、久美先生の死を乗り越えて、これからも皆で笑って生きていくんだ。

そう決意して、千恵の捜索を続ける。

■□??■□??■□??■□??■□??■□

どうしてこんなことになったのかしら……？こんなことを考えても仕方がないのは分かっているけれど、他に私にできることは何も無い。

昇降口の方にいる犬飼くんと五条くんの方へ目を向ける。

「ふざっけんなよ……！なんだよコレ！」

昇降口のガラス張りの扉は黒い毛で覆われており、どこにも出られる場所はない。消化器で殴りつけ、扉のガラスは砕けるものの、黒毛はビクともしない。

「どこか他の場所を探すしかなさそうだね」

「……チッ！」

……なぜ、こんなことになったのかしら……。あの丹波先生を、殺……した、あの黒いものは、なんだったのかしら？ああ、ダメね……。私は私の出来ることを探すべきなのに、上手く考えがまとまらない。

トントン、と肩を叩かれる。はあ、とひとつため息をついて振り返る。

「ごめんなさい。今は少し考えをまとめさせてちょうだ――――」

目の前いっぱいに広がったのは、生々しい赤色だった。反射的に体を捻って何とか回避したものの、右肩を少し食いちぎられてしまった。

脳が焼け付くかのような痛みに耐えて声をあげる。

「逃げてぇっ!!」

薄れゆく意識の中、走って行く男3人を見た。

「……ふふっ。……ほんと、うちの男衆は……情けがないったら……」

それを最後に私は意識を手放した。

第肆話／追駆（おいかけっこ）

「千恵ー！千恵ー！どこなの？いるなら返事して！」

「千恵！私達だよ！綾と利恵だよ！お願い出てきて！みんなで帰ろう？」

私達は多少の危険は伴うが、声をかけて探すことにした。こっくりさんはそれほど速くはなかったため、遭遇したとしても最悪逃げられるだろうという結論に至ったからである。

アレが恐らくこっくりさんであるということは利恵には話している。

「はー！見つかんないなあ！我が妹ながら隠れるのが上手だね！やりおる……！」

「あはは。そうだね。一応部室からもう一度たどってみたけど、……久美先生の以外には血はなさそうだったし。生きてる可能性が大きく上がったね」

「……うん。待ってて千恵！私絶対助けるんだから！」

■□??■□??■□??■□??■□??■□

なんで……？なんでなんでなんで……!?なんであの人がいるの……?!

「……きにぃ……つ……なさぁぃ……」

せっかくあの黒いのがどっか行ってくれたのに！なんで！わかん

ないわかんない……！利恵……助けて……！

ペタリ、と。すぐ近くで音がした。心臓の鼓動がうるさい。周りの音を拾えない。それがさらに焦りを生んでさらに鼓動がはやくなる。

静まって！静まってよ……っ！

ペタリ

先程よりも近くに音を感じてビクリと肩を震わせてしまう。それが原因で、ゴトリと音を出してしまった。距離が近づいたこの状況で。

お願い……！どっか行って……！お願い！

音がしない。声もしない。

（行った……？）

目を開けた。

「せきにぃつきなさぁいぃ」

血に濡れて目にぽっかり空いた穴が、私を見ていた。目の無い目で、私を覗き込んでいた。

殺されたはずの、久美先生が、私の目を、間近で、見ていた。

「いっいやあああぁぁぁぁぁぁぁぁあっ!!」

■□??■□??■□??■□??■□

――――――や……あぁぁぁ……！

「あやちー！今の声!?」

「うん、千恵だ！急がなきゃ！」

声のする方へあらん限りの力で廊下を蹴って向かった。この方向なら調理実習室だと見当をつける。

「あやちー５０ｍ走５私より速かったでしょ?私は良いから先に千恵を助けに行って！」

「嫌だよ！」

「じゃあどうするの！」

喋る時間も惜しいと無言で利恵をすくい上げてお姫様抱っこを敢行する。

突然の出来事に硬直していた利恵だったが、理解が追いついて、こう言った。

「……あやちー。抱いて?」

「利恵ちょっと静かにして！」

走ること数秒で調理実習室へ到着した。そこで大人のような背格好の人影が千恵と思われる小柄な影の首を締め上げているのが見えた。

私は利恵をそこら辺に転がして体当たりした。しかし、思っていたよりも抵抗がなく、人影と一緒に部屋の奥へ突っ込んでしまった。

身体中を打撲して痛むが、取り敢えず離れて倒れたヒトカゲを見た。そして、言葉を失った。

「……な、んで……この、人が……。久美先生が、動いてるの……？」

ゆっくりと立ち上がる、変わり果てた姿の久美先生を前に、私は呆然と立ちすくむことしか出来なかった。

千恵の咳き込む音で我に返った私は立ったまま動かない久美先生を見た。着ていた服はボロボロで、豊かだった髪の毛はほとんど抜け落ちている。歯はひとつも残っておらず、口からは粘着質な血が垂れている。目のあった場所には虚ろな穴があるだけである。美人と噂されていた整った顔立ちも今では見るかげもない。

不意に感じる悪寒。

「利恵、千恵！逃げるよ！」

「「うん！」」

廊下に出た私達は調理実習室の中からビチャビチャと液体が溢れ出るような音を聞いた。

瞬間。廊下と部屋を区切る壁が吹き飛び、中からこっくりさんが姿を現した。

「ひぃっ……！なんでここにアイツがいんの!?向こうに行ったじゃん！」

「千恵、今はそんなのいいでしょ！行くよ！」

完全にトラウマを植え付けられた千恵が足を止めそうになるが、利恵が腕を引いて走る。

こっくりさんは爪を床に沈めると、身体を後ろに傾けた。次に私が感じ取れたのは、風切り音だけだった。瞬き1回のうちに、こっくりさんは私の視界から消えていた。

隣を見ると、ついさっき一緒に走っていた人影が消えていた。妹を救おうと奮起した、頼もしい千恵の姉が消えていた。視線を前に向ける。こっくりさんが、ジタバタと暴れる人影の頭を咥えこんでいた。

「……うぎっ……あえ……お”ぇ”……っ！だ……っ”げぇ……！」

ぶつり、ゴリっ、ボキッと。命が断ち切られる音がした。

ドサリと口から零れ落ちる身体。咀嚼し、骨を砕く音がする。

「利恵えええええええええええええええ!!!!!!」

見えなかった。救えなかった。……私のせいだ。もう嫌だ。もう何も考えられない。もう何も考えたくない。

ぼうっと床を見つめている私の視界の真ん中に、血に濡れた肉塊が吐き捨てられた。

それを見て、私の中でぷつりと何かが切れた。

気がつけば私はこっくりさんに向かって箒を振りかぶっていた。

当のこっくりさんはニタァ……と口を裂いて嗤っていた。

振り下ろす前に箒を折られて何かが私の脇腹を貫いた。せめて千恵だけでも、と振り返って血を吐きながら言葉を紡ぐ。

「……に……げ、て……」

顔をくしゃくしゃにして、涙を流しながら千恵は反対方向に走っていった。

「……最後に、誰かを……助け、られたかな……？」

千恵、上手く逃げられるといいな……。

こっくりさんに放り捨てられた私は何故か最後に私の傷を舐める白い小さな狐を見た気がした。

■□??■□??■□??■□??■□

先程からそこかしこで悲鳴が聞こえますね。こんな時間に私以外の生徒がいるとは考えにくいですが……。

ああ、オカルト研究部が肝試しをしているんでしたね。楽しそうでなによりです。……しかしそれにしても騒がしいですね。少し注意しに行きましょう。

■□??■□??■□??■□??■□

走っているうちに明かりのついた部屋の前に来た。

誰かいるのだろうか。

誰でもいい、誰か助けて……。

「……ちょっと、貴女大丈夫ですか?!」

身体に力が入らない。意識も朦朧(もうろう)とする。でもこれだけは言わないと。

「……綾ちゃ……を……助け……」

伝えたい意志とは裏腹に、声は上手く出てくれない。視界が黒くなっていく。

「あっ!ちょっと!」

私の言ってること、ちゃんとわかってくれたかな……?

生徒会長の成瀬(なるせ)櫻子(さくらこ)さん――――。

第伍話／参白（しろみっつ）

「……うっ。……つぅ……！」

痛い。……痛い？私、死んだはずじゃあ……。

まだ痛む腹部の傷は跡は残っているがほとんど塞（ふさ）がっていた。身体中にあった細かい裂傷は全て綺麗に消えている。

「……あの白い狐、かな」

私が意識を失う前に見た白い狐。この現象はあの狐が起こした可能性が高い。ぼんやりとしていた意識の中で傷を舐めていたのを覚えている。

しかし、身体を起こして周囲を見渡しても、もうどこにもいない。

あるのは、私の親友だった利恵の頭の無くなった死体。それだけだった。それが私に強烈な吐き気を与え、耐えることが出来ずに倒れていた廊下の端（はし）で嘔吐する。

苦しい。頭が痛い。……首を食いちぎられる利恵のほうがきっともっと、もっと、もっと苦しかっただろう。吐き気が増す。頭がもう1つ心臓のようにズキズキと波をもって痛む。苦しい。

誰か……助けて……

■□??■□??■□??■□??■□??■□

どうしたものでしょうか……。

私（わたくし）２年成瀬（なるせ）櫻子（さくらこ）、生徒会長史上最大級に困惑しています。

私が生徒会室の扉を開けるとともに倒れ込んで気絶してしまったオカルト研究部の部員、古宮さん――――こちらはお姉さんでしょうか、妹さんでしょうか――――は全身血塗（まみ）れで憔悴（しょうすい）しきっており、それはとてもではありませんが演技には見えません。しかし、先程の様子を見るにどうやら緊急性のある用事のようでしたし、申し訳ありませんが起きてもらいましょう。意識も浮上しかけているようですし。

古宮さんの鼻をきゅっと摘む。穏やかな顔を段々と顰（しか）めていく。眉間にしわがよる。目と口がピクピクと動き出す。ガバリと体を起こすのに合わせて鼻を解放した。

「――――っぷは！」

「おはようございます」

安心して頂こうと穏やかな笑顔で挨拶をすると何故か怯えられました。解せません。これは事情を聞くのに時間がかかりそうですね……。

■□??■□??■□??■□??■□??■□

「綾！」

……ゆうき？なんでゆうきが……？

「綾！しっかりしてよ、綾！」

私は無意識のうちに優樹にすがりついていた。そして、今はただ何

もかも忘れて泣きたいという欲求を満たした。

「……ごめんね。迷惑かけちゃって」

「いや。仕方ないよ。……親友が死んだんだから」

私はなにも答えることが出来ずに、ただ優樹についていった。優樹の背中は、いつもよりも大きく感じた。それに安心感を得た私は、浮かんだ質問を口にした。

「そういえば優樹、なんでここに?晋助先輩と沙苗先輩は?」

「……。綾が心配になってさ」

「ええ?!」

私の心配をして来てくれたと聞いて、こんな時なのに心臓が高鳴って顔が熱くなってしまう。このような不意打ちはずるいと思うのだ。

「あ、で先輩達は?」

照れ隠しに質問をした。しかし、すぐには答えが返って来なかった。しかし、私が再び口を開こうとした時、答えは返ってきた。

「多分、他の場所に行ってるよ。実はさ、昇降口、なんだか毛で覆われてて出れなかったんだ。なんだか動物の毛みたいだったよ」

……毛?こっくりさんが狐だからかな。

「……あれ?こんな所に扉なんてあったっけ」

「え？」

言われて指の指されている方を見ると、そこには見覚えのない扉があった。錆びて赤茶けた鉄製の扉だった。さらにその扉には大量のお札と、血のような色をした鎖で閉じられている。

「いや、あってたまるもんですか。普通は扉がある場所じゃなくて扉がなかったよねって確認しない？」

この幼馴染は昔からどこかズレているのだ。同じ物を見てても私達とは別のところで驚いていたりするのだ。今はいつもと変わらないそれが安心感を与えてくれる。

突然、近くで液体が叩きつけられたかのような音が鳴った。音のする方を見ると、べっとりと血がついていた。

嫌な予感が心臓を早打たせ、素早く周りを確認するが、こっくりさんは見当たらない。どうやら食べた誰かを吐きつけた訳ではないようだ。

「……これ、文字だ。漢文……だね。僕、漢文苦手なんだよな……」

「私、得意だからそのまま訳して読むね？……えっと。」

『汝、呪われし人。汝、この学舎よりでることは出来ない。もし出たければ、白きに認められし者、白き参を連れてここへ来い』

疑問顔の優樹に、取り敢えず出たければ人を集めればいいんだよ、と伝える。なるほど、と返事が返ってきたところで私は、気絶する前に見た白狐を思い出した。

漢文の『参』は「参る」じゃなくて、漢数字の「参」だとすれば、アレはそのうちの一匹?･そうなると、他に、あと二匹、白狐がいるのだろうか。

「探さないと……!･」

「うわあああああああああああ!!･」

「優樹!?･」

優樹が突然大声を出して走り出した。後ろから大音量の鳴き声が聞こえる。こっくりさんだ。

振り返る時間すら惜しく感じて、そのまま駆け出す。恐怖で呼吸が引き攣るが、息苦しさを無視して走る。呼吸は後で整えられても、追いつかれてしまってはその後すらないから。

長距離、短距離問わず学年上位という無駄な身体能力の高さでもって優樹に追いついて並走する。幸いにもこっくりさんはゆっくりと歩いて追ってきている。きっと逃げ切れるはず。

「……っはぁ、っはぁ……クソッ!」

不意に優樹が私の胸に肘を打ち付けた。ただでさえ苦しかった呼吸が、強制的に肺の中の空気を吐き出させられたことで、苦しさがピークに達して足がもつれて転けてしまった。

「ははー!･あはははは!･僕のことが好きなんだろう!?だったら僕のために死ねよ綾ぁ!･じゃあなァ!」

私は苦しさに喘ぎながら愕然とした。ついさっきまで大きく、頼も

しかった幼馴染の背中が、今ではとても遠くに見えた。こちらを振り返った優樹の顔は、自分は生き残れることの嬉しさに満ちていた。笑顔だった。

「……うっぐぅ……ケホッ……！」

しかし今は傷ついている時間すらない。とにかく進まないと。こっくりさんがまだ遊んでいるうちに。でなければ、次は私が、私が殺される！這いずってでも、とにかく前に！

ざりっと何かが床の石材を削る音がした。

私の上を風が走った。

視界の先で、回り込まれた優樹がこっくりさんにこちらへ向かって吹き飛ばされるのを見た。吹き飛ばされた優樹は私の近くまで転がって、呻き声をあげ始めた。

私はそれを冷めた目で見ていた。

「……ぐうっ……がはっ……。はぁ……はぁ……！……れか……すけ、ろよぉ……！僕を助けろよお！あああああっ！クソクソクソクソ！おい綾ぁ！役立たずが！なんで化物の気一つ引けないんだよゴミがぁ!?」

優樹はそんな勝手なことを言ってくれる。この満足に動けないこの状態でどうやって気を引けというのか。

ふぅ、と一息ついた。呼吸はもう整っている。ならこれからとる行動はただ一つ。

私は、立ち上がって優樹を背負った。

「……っははは！そうだよ。それでいいんだよ！早く行けよ！」

「うっさい！」

「……は？」

さっきから本当に勝手なことばかり言ってくれるものである。こいつの器の小ささはわかった。性格の悪さも。今じゃ顔を見るだけでイライラする。でも、そんなやつでも死んでいいなんてことがあるわけない。

「……顔見知りが死んじゃったら、寝覚めが悪いじゃない。だからこれは、私のため。アンタのためじゃないから」

「……」

取り敢えず走り出し、階段を下りるところで振り返ってこっくりさんの様子を伺ったが、追ってきてはいなかった。